

『大正新脩大藏經』の初版・ 再刊・普及版の刊行をめぐる

會 谷 佳 光

はじめに—『大正新脩大藏經』と東洋文庫

『大正新脩大藏經』（以下「大正藏」と略す）は、1922～34年に近代活字を用いて日本で出版された一大仏教經典叢書であり、正藏55巻、続藏30巻、別巻圖像部12巻、『昭和法宝総目録』3巻の全100巻からなり、3,493部13,520巻の經典を収録し、280万円（現在の約20億円）の巨費を投じて、300余名を動員して編纂された⁽¹⁾。その底本には、増上寺三大藏經のひとつ高麗再彫本（以下「麗本」と略す）が使われ、校本として増上寺の宋思溪版大藏經（以下「宋本」と略す）、元普寧寺版大藏經（以下「元本」と略す）をはじめ、宮内省図書寮の福州版大藏經（以下「宮本」と略す）、正倉院の聖語藏（以下「聖本」と略す）、大英図書館やフランス国家図書館等の敦煌文献等が用いられた。こうして出版された「初版」に対して、1960～79年に誤脱等を補訂した再刊本が刊行された（以下「再刊」と称す）、1988～92年にはその廉価版として普及版が刊行された。その後、大正藏は、WEB上のテキスト・画像データベースなど様々な形に変化しながら、仏典のスタンダードテキストとして、これまで世界中の研究者を裨益してきた。

本題に入る前に、大正藏の編纂と東洋文庫のかかわりについて少し述べておきたい。

東洋文庫は1924年11月に財団法人として創設されたが、その淵源は1917年8月に元ロンドンタイムズ社北京特派員で当時袁世凱の顧問をしていた George Ernest Morrison（1862～1920）収集のモリソンコレクション約24,000冊を購入したことに始まる。大正藏は、後述のように、1922年9月に刊行の議が起り、翌年4月に予約販売のための会員募集が行われた。これはまさに東洋文庫の揺籃期にあたり、財団法人設立の

ために組織体制、蔵書の拡充を図っていた時期にあたる。

「東洋文庫大正時代の購入書籍リスト（和書・漢籍）」(http://124.33.215.236/open/Taisyo_ShowAll_w.php)を調べると、「1138 大正新修大蔵経 和装55帙ノ申込金 大正12年5月30日 大正一切経刊行会」とあり⁽²⁾、かつ『大正新修大蔵経総目録 附会員名簿』（大正一切経刊行会、1930年5月。家蔵）の会員名簿（全2,024件、他追加会員540件、番外157件）の81番目に「東洋文庫」の名が見えることから、大正蔵の予約申込み開始後まもなく入会していたことがわかる。この時購入した大正蔵は線装本であり、第1～85巻の全85巻がⅢ-13-A-807の請求記号を付されて現在も所蔵されている。

他にも、東洋文庫は、榎文庫（東洋文庫第9代理事長榎一雄（1913～89）旧蔵）の請求記号 E-Ⅲ-12-A-1001に和装本（第1～55巻）、Ⅲ-13-A-807に洋装本1セット（第1～55巻、『昭和法宝総目録』第1～3巻）を所蔵する。後者については、東洋史学者藤田豊八（1869～1929）旧蔵であり（巻首に印記「藤田鎭峯／藏書之記」あり）、『大正新修大蔵経総目録 附会員名簿』には1331番に「東京府 藤田豊八」と見える。再刊については、請求記号Ⅲ-13-A-807に第56～85巻の続蔵全30巻、請求記号Ⅲ-13-A-807に第23・28・30・32・49～53（51・53は重複）・85巻を所蔵する⁽³⁾。

東洋文庫は、大正蔵編纂のため所蔵資料の提供を行っており、『大正新修大蔵経刊行略誌並芳名録』「援護者芳名（一）經本借用」に「財団法人東洋文庫」の名が見える。該当するのは第54巻 No.2133A『梵語千字文』であり、その脚注には「[㊦]東京東洋文庫蔵本」と底本が東洋文庫本であることが明記される。東洋文庫の所蔵資料が採用された背景には、東洋文庫草創期の主要な関係者が大正蔵の編纂に関与していたことも大きかったであろう。すなわち三菱第3代当主で東洋文庫創設者の岩崎久彌が岩崎文庫の収集に当たって顧問に仰いだ和田維四郎（1856～1920。雲村文庫）、モリソン文庫主任、財団法人設立後は東洋文庫主事を務めた石田幹之助（1891～1974）も、その蔵書を提供している⁽⁴⁾。また東洋文庫の第8代理事長辻直四郎（1899～1979）は、大正蔵の初版完成時には援護者・翼賛者として⁽⁵⁾、再刊の奥付には相談役として名を連ね

ている。また第85巻に採録した敦煌本の再刊に当たっては、東洋文庫所蔵の敦煌文献マイクロフィルムコレクションを使って、初版で欠落していた文字が補訂されている⁽⁶⁾。

もう一人東洋文庫に縁故のある大正蔵関係者がいる。それは第1巻阿含部上の奥付頁に編集部第三校合所で宮内省圖書寮の「舊宋藏東漸寺本」すなわち宮本の校合担当者として記載される土肥義圓である。土肥義圓は、関東大震災の前まで第1巻の編輯に参加した後、郷里に戻り、のちに高野山真言宗檀育山如意輪寺五明院（愛媛県宇摩郡金生村）の住職となり、高野山で要職に就いた人物であり、東洋文庫の研究者として中央アジア研究班の総括・運営委員を長年にわたって務められた土肥義和氏の御尊父である⁽⁷⁾。筆者は現在東洋文庫研究部の研究者として科学研究費を採択され、大正蔵の編纂について研究しているが、以前には慶應義塾大学の科学研究費（課題番号：24242009、研究代表者：住吉朋彦）の研究分担者として宮本の書誌データ作成を担当したことがあった⁽⁸⁾。およそ100年近い時を隔てて、東洋文庫にゆかりのある方が大正蔵編纂のため同じ宮本を繕っていたことを知り、大正蔵と東洋文庫にかかわる奇縁を感じている。

さて、筆者は、これまで、実際に大正蔵の編纂に用いられたテキストのうち、大正蔵の脚注（校勘記）に底本・校本として散見する「増上寺報恩藏」の明本（以下「西蓮社本」と略す）を調査対象に定め、実際に大正蔵と校勘してテキストの異同等の状況を調査分析することで、大正蔵編纂の実態の一端を実証的に解明しようと試みてきた。その中で、大正蔵のテキストには底本・校本の再現性・正確性の点で非常に問題があることが改めて浮き彫りとなってきている。それだけではなく、底本と校本を混同して脚注に記載する事例や、脚注に西蓮社本が底本と記されているのに実際の西蓮社本は校本と一致する事例、はたまた初版では底本に従っていた文字を再刊時に何の注記もなく妄改した事例など、多くの問題点が存在することを明らかにした⁽⁹⁾。

上記の基礎的な研究成果を踏まえ、より緻密な比較分析作業に取り組むための前段階として、本稿は、大正蔵そのものの書物としての成立に関する調査・分析、いいかえれば、その書誌学的研究を行わんとするも

のである。具体的には、大正蔵の初版と再刊および普及版の諸版について、それぞれの刊行の経緯を概説し、初版・再刊・普及版の間に存在する問題点について明らかにする。これによって、今後、西蓮社本との校勘作業で大正蔵を取り扱う際、どのような点に注意する必要があるかを把握し、ひいては大正蔵の利用者に対して、より適切にこれを活用するための方法を提示したい。

なお、本稿では、大正蔵全100巻のうち、基本的に1928年11月に完成した正蔵全55巻を対象として取り扱う。これは、近代以前の漢文大蔵経の經・律・論・印度著述・支那撰述の各部を近代の仏教研究の成果によって再編した部分であり、目下、筆者が関心を持つ西蓮社本を大正蔵が採用した部分でもあるからである。

一 初版の刊行

大正蔵初版の刊行は、3期に分けられる。すなわち第1期は正蔵55巻（第1～55巻）の刊行、第2期は続蔵30巻（56～85巻）および『昭和法宝総目録』第1・2巻の刊行、第3期は図像部12巻および『昭和法宝総目録』第3巻の刊行である。本稿で取り扱うのは第1期の正蔵55巻であるが、全蔵完成後の再刊も取り扱うため、第2期・第3期についても適宜触れることになる。

まずは初版当時のことを記録した資料を挙げておく。

- ①『大正新脩大蔵経会則及内容見本』（大正一切経刊行会、1923年4月頃。家蔵）。大正蔵刊行に当たり、1923年4月付「刊行趣旨」、内容説明、内容見本、会則等を載せ、会員を募ったもの。
- ②小野玄妙「大正新修から昭和續修へ」（『現代仏教』第5巻第55号「大正新脩大蔵経完成記念号」（大雄閣書房、1928年11月））。正蔵55巻の完成が間近に迫り、大正蔵の主編者の一人小野玄妙がその苦難の数々を回想しつつ、正蔵完成後、続蔵の刊行に直ちに取り組むべき理由を述べたもの（pp.58-66）。
- ③『大正新脩大蔵経総目録 附会員名簿』（大正一切経刊行会、1930年5月。家蔵）。別冊として付される「刊行経過要略」は、小野玄妙が正

蔵55巻、続蔵8巻の計63巻と『昭和法宝総目録』第1・2巻を刊行するに至るまでの経緯をまとめたもの。

- ④『大正新脩大蔵経刊行略誌並芳名録』（大蔵出版株式会社、1943年5月。東洋文庫蔵）。このうち「刊行略誌」（pp.1～47）は、1932年6月の正統85巻の完成に際して小野玄妙が記した③「経過要略」に対して、編者が加筆追補したもの（p.47）。
- ⑤『ピタカ』第3年第1号（大蔵出版、1935年1月。大正大学附属図書館蔵）「大正蔵完成記念号」。大正蔵全100巻の完成を記念して刊行されたもの。

なお、この他、未見ながら次の資料があるという⁽¹⁰⁾。

- ・『最終の募集 大正新脩大蔵経会則及内容見本』（1927年10月頃）。1927年10月1日付「会告」等載せる⁽¹¹⁾。
- ・『大正新脩大蔵経』（1929年4月頃）。1929年4月付「続刊の辞」等載せる。これは第2期の続蔵刊行に当たって会員募集を行った時のもの⁽¹²⁾。

大正蔵の刊行の議が起こったきっかけは、明治期刊行の縮刷蔵経が高額なうえ入手も困難であったため安価な大蔵経が必要であったこと、天平古写経との対校を経た大蔵経が求められていたことにある。この当時の状況に鑑み、高楠順次郎（1866～1945）の呼びかけで1922年9月23日に麴町富士見軒にて相談会が開かれ、書名を「大正新修大蔵経」、出版書院を「大正一切経刊行会」とすること、（1）宋版以前の写経（天平古写経や敦煌写経）を主として対校すること、（2）縮刷蔵経1,908部8,415巻に、日本・朝鮮・敦煌発見の釈論など70部659巻を加えること、（3）各方面の専門家による校正を主体とすること、（4）5号活字四六倍判（B5判にほぼ同じ）西洋綴とする原案が策定され（以上③④による）、10月1日には鶴見総持寺にて仏教各宗派联合会より本事業に対する賛同の決議を得た（①）。同年中に行われた数度の協議によって高楠順次郎・渡邊海旭（1872～1933）両都監のもと編集のための組織、方針が決定された（③④）。以下は、『現代仏教』第5巻第55号「大正新脩大蔵経完成記念号」p.182掲載の大正蔵事業の5部門であり、浄土宗の僧侶で仏教学者の小野玄妙（1883～1939）が編輯主任となった。

- 一 編輯校合事業（第一～第五校合所、第六敦煌古写経調査、梵本・巴利本・西藏本調査、第七原本（悉曇）、第八所外校訂、第九加
点及び原語註）
- 二 編輯校正事業（校正部）
- 三 索隱目錄事業（索隱部、目錄部）
- 四 経営事業（都監部、主務部、配送部、宣伝部）
- 五 製版製本事業（印刷部、装釘部）

翌1923年正月より収録典籍と目録分類を検討・決定し（③④）、4月8日に両都監連名による「刊行趣旨」、会則および内容見本が発表された。①『大正新脩大藏経会則及内容見本』には『善見律毘婆沙』巻第2など4頁の見本組を載せる（書影を参照）。この見本組では、各巻巻頭書名の後に、その梵名（ローマ字表記）と麗本等の千字文函号を載せ、脚注の右半分に縦書きで校勘記、左半分に横書きで梵文の書名・品名・固有名詞・用語（ローマ字表記）をそれぞれ配しており、その後、実際に配本された初版とはだいぶ様相を異にしている。当時の発行実務は、書肆の新光社が担当していたから（③④）、これは同社によって作成された見本組であろう。装訂については、洋装本は特別誂極上洋紙、背革布製・天金の特製本と、上質表装の仮製本の2種、和装本は土佐紙特別漉、帙入り本（1巻4冊1帙）が予告されていた（①）。ところが、新光社は9月1日に発生した関東大震災によって全焼し、刊行にかかわる書類は無事搬出されたものの、大正蔵刊行事業からの撤退を余儀なくされ、以後、高楠順次郎が発行・編輯の両責任を負うこととなった（③④）。

高楠は1万円近くの大金を払って新しい印刷機を購入し、これを九段坂の印刷所京華社に設置して新光社を引き継いで印刷を担当させ、その後も印刷に必要な設備を増強していった⁽¹³⁾。その結果、震災後わずか半年の1924年4月8日、第1巻阿含部上が完成し、同月11日に東京美術学校（現在の東京藝術大学）にて挙行された聖徳太子一千三百三年御忌法要にて和装本が奉獻された（③④）。

【表1 初版の配本順と校合者数】を見ればわかるように、正蔵55巻を刊行するために、編集校合事業だけでも、第一～五校合所をはじめ知恩院・醍醐寺・万徳寺・大徳寺・東寺観智院・高野山等において、延べ

【表1 初版の配本順と校合者数】

配本順	巻	刊行年月日	校合者 数小計	第一	第二	第三	第四	第五	嫩煌 寫經	知恩院 天平寫經	醍醐寺 萬德寺 大德寺 天平寫經	東寺觀智院 其他古寫本	高野山 麗藏
1	1	1924/4/8	17	8	3	1			1	1	1		2
2	3	1924/6/20	22	12	3	2			1	1	1		2
3	4	1924/7/15	21	11	3	2			1	1	1		2
4	8	1924/8/15	20	11	3	2			1	1			2
5	2	1924/9/15	22	12	3	3			1	1			2
6	5	1924/10/15	22	12	3	3			1	1			2
7	13	1924/11/20	24	14	3	3			1	1			2
8	7	1924/12/20	24	14	3	3			1	1			2
9	14	1925/1/20	29	19	3	3			1	1			2
10	6	1925/2/20	29	19	3	3			1	1			2
11	15	1925/3/20	30	20	3	3			1	1			2
12	11	1925/4/15	30	19	3	4			1	1			2
13	16	1925/5/15	30	19	3	4			1	1			2
14	12	1925/6/15	31	20	3	4			1	1			2
15	9	1925/7/15	33	22	3	4			1	1			2
16	10	1925/8/15	38	23	3	4	4		1	1			2
17	17	1925/9/15	39	23	3	4	4		1	2			2
18	23	1925/10/15	34	18	3	5	3		1	2			2
19	32	1925/11/15	34	18	3	5	3		1	2			2
20	31	1925/12/15	34	18	3	5	3		1	2			2
21	25	1926/1/15	34	18	3	5	3		1	2			2
22	29	1926/2/15	34	18	3	5	3		1	2			2
23	26	1926/3/15	34	18	3	5	3		1	2			2
24	22	1926/4/15	34	18	3	5	3		1	2			2
25	28	1926/5/15	34	18	3	5	3		1	2			2
26	24	1926/6/15	34	18	3	5	3		1	2			2
27	27	1926/7/15	29	17	1	3	3		1	2			2
28	33	1926/8/15	27	15	1	3	3		1	2			2
29	34	1926/9/15	27	15	1	3	3		1	2			2
30	37	1926/10/15	28	15	1	3	4		1	2			2
31	35	1926/11/15	28	15	1	3	4		1	2			2
32	38	1926/12/15	29	15	1	3	4		1	3			2
33	50	1927/1/15	29	15	1	3	4		1	2		1	2
34	39	1927/2/15	29	9	0	3	4	7	1	2		1	2
35	36	1927/3/15	29	9	0	3	4	7	1	2		1	2
36	42	1927/4/15	29	9	0	3	4	7	1	2		1	2
37	52	1927/5/15	29	9	0	3	4	7	1	2		1	2
38	40	1927/6/15	29	9	0	3	4	7	1	2		1	2
39	44	1927/7/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
40	49	1927/8/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2

41	45	1927/9/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
42	30	1927/10/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
43	41	1927/11/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
44	46	1927/12/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
45	53	1928/1/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
46	47	1928/2/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
47	51	1928/3/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
48	18	1928/4/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
49	48	1928/5/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
50	20	1928/6/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
51	43	1928/7/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
52	21	1928/8/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
53	54	1928/9/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
54	19	1928/10/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
55	55	1928/11/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2

延べ人数合計 1,636名

凡例：本表は、初版の和装本の正蔵55巻の奥付によって作成したものである。第一～五校合所については下記の通り。

- 第一校合所（麗、宋、元、明蔵） 芝増上寺閻藏亭
- 第二校合所（正倉院聖語藏天平寫經） 上野帝室博物館
- 第三校合所（舊宋藏東禪寺本） 宮内省圖書寮
- 第四校合所（俱舍唯識古抄本） 大和法隆寺勸學院
- 第五校合所（章疏宗典史傳其他） 小石川大藏學院校經臺

1,636名もの人員が動員された。その結果、第1巻刊行以降、第53回配本の第54巻が13,000字の字母の彫印のため3ヶ月を要したのを除き、1巻1,000頁にも及ぶ大冊を、經典の校合から製版・校正・印刷製本の工程を経ながら、毎月1巻という驚異的なペースで(2)(3)(4)刊行し続け、1928年11月の第55回配本によって正蔵55巻の刊行を完遂した。前稿でも指摘したように、大正蔵には多くの問題点が存在するが⁽¹⁴⁾、その主たる要因がこの刊行ペースにあったことは間違いない。

次に、初版刊行中に行われた補訂の試みについて考えてみたい。

上述のように、初版には和装本と洋装本があり⁽¹⁵⁾、基本的に発行年は同じであるが、第2回配本の第3巻のみ印刷日・発行日が異なる。すなわち洋装本は1924年5月30日印刷、6月10日発行であるのに対し、線装本は洋装本の発行5日後の6月15日印刷、6月20日発行となっている。この印刷における半月のズレが補訂等によるものであるか確かめるため、

第3巻の洋装本・和装本、特に脚注を比較したところ、内容に異同は見られないものの、洋装本では欠落したり、かすれて判読不能な文字が、和装本では鮮明であったり、判読可能であることがしばしば見受けられた⁽¹⁶⁾。洋装本と和装本では本文の料紙（特別誂極上洋紙と土佐紙特別漉）が異なるから、この料紙の違いが影響して、洋装本の印刷時に印刷機の調整などに時間がかかり、和装本の印刷までにタイムラグが生じてしまった可能性も考えられる。なお、第3巻に限らず、和装本に比べて洋装本の方が印刷状態が悪い傾向にあるが、和装本は和装本でインクのにじみが見られ、必ずしも和装本が完璧であるわけではない。上記の両本の特徴は、再刊時の会報『大正新脩大蔵経会員通信』でも言及されるとおり、再刊に用いる原本を選択する際に重大な影響を与えることになる（後述）。

現在確認のできる最初の補訂の試みは、正誤表の作成である。第1巻阿含部上刊行の約2年後の1926年4月、大正一切経刊行会と大雄閣書房の連名で、高楠順次郎を発行兼編集者として『大正新脩大蔵経索引第1巻阿含部上』が出版された⁽¹⁷⁾。その末尾にわずか1頁ながら「第一巻阿含部上正誤」と題する正誤表が掲載された。索引は、索引部の小野玄妙等が編集を担当したから、この正誤表は小野等が索引作成の過程で発見した本文の誤り等を記録したものであろう。正誤の内容は、目次2件（経典番号の誤り）、本文21件（関連経典の経典番号の誤り2件、誤字・脱字・衍字17件、脚注番号の位置の誤り2件）、脚注26件（梵文（ローマ字表記）の綴りの誤り24件、数字の誤り1件、脚注番号の誤り1件）、欄外4件（経典番号の誤り1件、書名の誤り2件、巻次の誤り1件）の全53件である。

③『大正新脩大蔵経総目録 附会員名簿』「附言」によれば、1930年5月時点の状況として、第一巻阿含部上刊行後、巻別索引の原稿が45冊分完成しているものの、編纂方針を根本から改変して、人名・地名・書名・梵名その他部類別に1冊ずつ編集することとし、第1巻として膨大な全蔵の梵語索引を出版する予定である旨予告している（p.213）が、この索引刊行事業は、戦時下による出版の停滞と高楠・小野両氏の逝去によって中絶し、わずかに、1940年6月に阿含部第一巻、1942年2月に目

録部第17巻、1947年2月に法華部が刊行されたにすぎない。これらは「項目索隠」「音次索隠」「字劃索隠」からなり、世界・諸法・惑業から器物・成語・雑語に至る64項目の「項目索隠」（各項目内は音順で配列）の見出し字に対して、音順・画数索引を付ける体裁を取っている。しかし、これら一連の索隠には正誤表に類するものは見られない。

また、初版では、誤って重複して収録してしまった経典を差し替えた例が1件確認されている。再刊時の会報『大正新脩大蔵経会員通信』第64号（1971年5月）によれば、第17巻No.0738『仏説分別経』（竺法護訳）は、初版では第14巻のNo.0495『仏説阿難分別経』（乞伏秦沙門釈法堅訳）の代わりに誤って収録されたこと（pp.757～760）、第14巻と第17巻に重出していたが、初版の一部では『仏説阿難分別経』を正しく収録しているとす⁽¹⁸⁾。東洋文庫所蔵本で確認すると、請求記号Ⅲ-13-A-807の和装本では正しく『仏説阿難分別経』を収録するのに対し、Ⅲ-13-A-807の洋装本では『仏説分別経』が重出している。一方、榎文庫の請求記号 E-Ⅲ-12-A-1001の和装本では重出の『仏説分別経』が綴じられているものの、同じ和装本用の料紙に印刷された『仏説阿難分別経』が綴じられずに挿入されている。このことから、初版刊行時のいずれかの段階で重出に気づき、『仏説阿難分別経』で活字を組み直した訂正版が会員に配布されたものと考えられる。そこで、請求記号Ⅲ-13-A-807の和装本を改めて見てみると、pp.757～758は他の丁と揃えて綴じられているが、pp.759～760は1mm弱内側に寄った形で綴じられている。これは配布された訂正版を差し替えて綴じ直した痕跡と考えられる。なお、Ⅲ-13-A-807の洋装本に訂正版は挿入等されていない。

初版の刊行過程において補訂を行う最後の機会として、正蔵55巻完成を記念して行われた、和装50部、洋装250部合計300部限定の追加頒布が挙げられる⁽¹⁹⁾。この追加頒布の際に『大正新脩大蔵経索隠』第1巻阿含部上の正誤をはじめ、初版時に蓄積された正誤の成果が取り込まれた可能性が考えられる。しかしながら追加頒布分の購入先を特定することは難しく、補訂の有無を確認できていない。

二 再刊の刊行

再刊については、再刊の各回配本時に同封された会報『大正新脩大藏経会員通信』によって詳しい事情を知ることができる。『会員通信』は、第1号が1960年8月に発行され、最終の第85号が1978年10月に発行された後、1993年3月に全85号を複製して末尾に「大正新脩大藏経再刊発願者」を付した『大正新脩大藏経会員通信合本』が刊行された。いずれも発行者は大正新脩大藏経刊行会である。以下、『会員通信』の各号によって再刊の経緯を整理してみたい。

再刊の理由としては、1945年3月10日の東京大空襲により、大藏出版株式会社⁽²⁰⁾がその社屋とともに大正藏等出版物の在庫品ならびに紙型等のすべてを失ったこと、初版購入者の間にも戦災によって大正藏を焼失した者が多かったこと、海外からの需要が年々増加していったことなどが挙げられる⁽²¹⁾。それから10年余の時を経て、1959年、「大正新脩大藏経刊行会」（代表委員：長宗泰造（大藏出版株式会社代表取締役））が組織された。同刊行会は、1960年3月に著した「大正新脩大藏経再刊の趣旨」の中で、大正藏の刊行後、25年の歳月が過ぎ、国内外の需要の高まりにもかかわらず、非常に入手困難な状況となっていることに鑑み、正統85巻と『昭和法宝総目録』3巻を再刊すると宣言し、かつ「事業の学術的意義を昂めるため、正誤を調査し、補逸を附加する等のことをも追って進めていく」との方針を定めた⁽²²⁾。その後、第1回配本までに、初版の洋装本をもとに新たにフィルムを作ってオフセット印刷すること、補訂は誤字・脱字に止め、年月をかけて完璧な正誤表を作成すること、大正藏に収録すべき経論類を補逸することを決定し、さらに正統85巻に続く続藏や索引を作成することを目標に定めた⁽²³⁾。1960年7月刊行の第50巻を皮切りに、1962年4月刊行の第21回配本までは初版と同様毎月1巻のペースを維持していた。しかしながら原本の不鮮明部分や誤脱等に対する補訂作業を行った影響と、同年4月に始まった『大正新脩大藏経索引』の刊行による大藏出版株式会社の負担増大もあり、徐々に刊行ペースを落としつつも、1978年7月刊行の第43巻を以て18年かけて正藏

55巻の再刊事業を終えた。全88巻の完結は翌年6月刊行の『昭和法宝総目録』第3巻である。

次に、再刊時に行われた補訂作業の実情について『会員通信』によって詳しく見てみたい。

再刊当初の状況は第1号 p.2「再版の印刷と製本」によって知ることができる。初版の洋装本は和装本より印刷が不鮮明なため、オフセット印刷すると文字が写真に写らないなどの欠点があったものの、和装本は和装本で和紙へのインクののにじみによって細字の注が真っ黒になるなどの欠点があったため、洋装本を底本とし、汚れや印刷の薄い頁は状態のよい別本から取ることとし、欠けたり印刷不鮮明な文字は縮刷蔵経や宋本等によって調べて、新たに活字を組み直して印刷し、底本に切り貼りすることとした。ただし、同一字数の訂正しかできないため、完璧な正誤は将来の正誤表の作成を待つこととなった。装訂については本革ではなく、より強靱なナイロン樹脂の合成皮革が使われた。またオフセット印刷で和装・洋装の両本を作成するのは、印刷工程上、多大な手数がかかるため和装本は作らず洋装本のみとした⁽²⁴⁾。

『会員通信』第9号(1961年4月) p.4「編集室」では、遅配の理由に触れる中で、初版中の不明瞭な文字を活字に組んで印刷し、それを一字ずつ切り離して原本に貼り込む作業や、明らかな誤植や数字などを訂正する作業の他、初版の和・洋両装ともに脱落する文字は他の一切経に当たって確認しているため時間を要しているとか、各界の「先生方」から提供された正誤表についても調査のうえ直していると編集作業の一端を説明している。再刊の補訂に協力した人物について『会員通信』が言及するのは、下記の人々である⁽²⁵⁾。

大山公淳(1895～1992、高野山大学名誉教授)：第18巻密教部1の正誤表を提供。これによって『清浄法身毘盧遮那心地法門成就一切陀羅尼三種悉地』に「文永二年寫高野山寶壽院本」が校本として追加された(第8号(1961年3月) p.4「校訂のお知らせ」)。

干潟龍祥(1892～1991、九州大学名誉教授)：全巻にわたって40頁に上る正誤表を提供。

渡辺照宏(1907～77、東洋大学文学部教授)：第1・8巻の一部に

関する正誤表を提供。

土橋秀高（1914～89、龍谷大学文学部教授）：第12巻の一部に関する正誤表を提供。

台湾の蔡運辰（1901～92、著有『二十五種藏経目録対照考釈』（新文豊出版公司、1983年12月））：『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜経』等5経の重出に関する情報を提供（以上第9号（前掲）p.4「編集室」）。

石上善応（1929～、大正大学名誉教授）：第15巻『月灯三昧経』の脚注梵名について梵本原本との校合を依頼（第11号（1961年6月）p.4「校訂のお知らせ」）。

秋月龍珉（1921～99、埼玉医科大学名誉教授）：第50巻『景德伝灯録』について初版当時未見の宋版との校合を実施（第19号（1962年2月）p.4「原本訂正の近況」）。なお、この宋版との校合は再刊に採録されていない）。

『会員通信』第9号ではこの他に、第8回配本の第32巻から、原本に貼り込んだ補訂箇所を再校する作業を加え、なおかつフィルムに訂正文字を刷り込む作業が発生したことで、技術的な問題によって時間を要することとなったことが報告されている。

もっとも詳しく補訂作業の実態を伝えるのは、『会員通信』第19号（前掲）p.4「原本訂正の近況」である。まず2冊の洋装本を用意して不明文字・汚れ等を訂正表に書き出しつつ、縮刷藏経・卍藏・東大寺等所蔵の刊本・写本等と校合して原本を修正し、これを編集者が再校正して不備な点を頁ごとに修正する。欠けた部分のある文字は写真に感光する特殊鉛筆で書き入れを行い、不鮮明な文字はあらかじめ印刷された活字表から一字ずつ切り離して原本に貼り合わせる。こうしてできあがった原稿を撮影に回して、その青焼写真を再校正する。上記の補訂作業の様子を撮影した写真も掲載されている。また、1965年6月26日に開催された「高楠・渡辺・小野三先生顕彰会」の遺墨遺品展覧会では、再刊の校訂原稿や青焼写真が大正新脩大藏経刊行会から出品・展示されたとのことである（『会員通信』第43号（1965年7月）p.4）。

大正蔵の再刊計画では、より完備した正誤表1巻の刊行を予定してい

【表2 再刊正誤表件数及び普及版修正率】

巻	再刊正誤表の件数				普及版
	計	不鮮明	正誤	異常なし他	修正済
2	37	19	18	0	0
5	8	8	0	0	8
6	30	30	0	0	28
7	18	15	3	0	18
12	21	18	3	0	21
17	15	13	2	0	6
20	28	25	1	2	5
21	29	24	0	5	4
23	20	19	1	0	17
28	34	29	1	4	30
40	26	25	1	0	7
42	26	25	0	1	6
45	26	22	4	0	24
47	23	23	0	0	9
49	20	20	0	0	20
51	12	11	1	0	12
計	373	326	35	12	215
比率		87.4%	9.4%	3.2%	59.6%

た。これが完成すれば、再刊の際、どこを補訂したか、あるいは本文の補訂はされていなくても補訂が必要な箇所を一覧することができたはずである。しかしながら結局正誤表1巻は刊行されなかったようである。その代わりというわけではなからうが、再刊には、小紙片に印刷された正誤表が付された巻がある。東洋文庫と大正大学図書館の所蔵本で正蔵全55巻を調べたところ、【表2 再刊正誤表件数及び普及版修正率】のとおり、計16巻に正誤表が貼付されていることを確認できた。正誤表の冒頭には「※第幾巻の左の文字が不鮮明ですので、この紙の文字を貼りつけて下さい。」「※第幾巻の左の文字が不鮮明ですので御訂正ください。」といった文言が印刷されている。正誤表に指摘された箇所は計373件に上り、そのうち印刷の不鮮明な箇所（文字の欠落・ツブレを含む）が326件、正誤にかかわる箇所が35件、再刊の該当箇所に異常が見られなかったもの、及び指摘箇所を特定できなかったものが計12件あった。

【表3 再刊正誤表配本順・形式一覧】

配本順	巻	出版年	正誤表		
			指示	枠	種別
40	49	1964/12/25	貼付	無	1
41	82	1965/2/27	(正誤表未発見)		
42	5	1965/5/31	貼付	無	
43	62	1965/7/30			
44	42	1965/8/31			
45	20	1965/12/30			
46	66	1966/5/31	貼付	有	
47	6	1966/10/31	(正誤表未発見)		
48	34	1966/12/28	貼付	有	
49	47	1967/5/20			
50	81	1967/7/31			
51	12	1967/11/30	(正誤表未発見)		?
52	76	1968/1/31	訂正	有	3
53	21	1968/4/25			
54	45	1968/8/31			
55	68	1968/10/31			
56	17	1968/12/30			
57	40	1969/4/30			
58	2	1969/9/30			
59	79	1969/11/15	(正誤表未発見)		
60	10	1970/2/15	訂正	有	
61	31	1970/6/15			
62	64	1970/9/30	(正誤表未発見)		
63	69	1970/12/10	訂正	有	
64	14	1971/5/31			
65	78	1971/9/25	(正誤表未発見)		
66	7	1972/3/20	訂正	有	
67	75	1972/6/30			
68	23	1972/7/31	(正誤表未発見)		
69	63	1972/9/15	訂正	有	
70	51	1973/4/15			
71	60	1973/7/31			
72	28	1974/3/1			

※第1～39回配本、第73回配本以降では正誤表は未発見。

また続蔵56～85巻に範囲を広げると、第60（4件）・62（22件）・63（8件）・66（15件）・68（12件）・69（25件）・78（25件）・81（7件）巻の計8巻にも正誤表の貼付を確認できた。これら各巻はすべて再刊の第40～72回配本の範囲内にあり、時期的には1964年12月から1974年3月の約10年間にあたる。この範囲内であって、正誤表を確認できていない巻もあるが、他の大学図書館等の所蔵本を調べれば、正誤表が見つかる可能性がある⁽²⁶⁾。

正誤表が作成され、会員に配布された時期については、再刊の各巻の発行とほぼ同時であったと考えられる。正誤表は、形式上、枠なしで、正誤表の文字を切り取って該当箇所貼りつけるよう求めたもの（第40～46回）、枠ありで、貼り付けを求めたもの（第47～51回）、枠ありで、単に訂正を求めたもの（第53～72回）の3種に分類でき、

【表3 再刊正誤表配本順・

形式一覧】のように、再刊の配本順に従って第1種から第3種に移り変わっていく。これは再刊とほぼ同時に正誤表が作成・配布されたことを示している。

大正新脩大藏経刊行会による再刊事業は、再刊の補訂・刊行・配本と、索引の刊行・配本とが同時並行で進められていた。よって刊行済みの再刊について一々見直して正誤表を作成するのは、多大な負担を同会に強いるものであった。正誤表が確認されはじめるようになるのは1964年12月発行の第40回配本（第49巻）からであり、この時期は1963年までほぼ維持できていた毎月1巻の刊行ペースが1964年から2～3ヶ月に1巻となり、遅延が深刻化し出した時期と重なる⁽²⁷⁾。おそらく刊行の遅延から配本を優先する必要に迫られて、原本に対する補訂作業の一部を断念して、正誤表で対応することになったのであろう。なお、正誤表の付された巻でも、再刊の本文が補訂されているから、すべての補訂を正誤表に譲ったわけではない。

要するに、再刊には配本の時期によって、本文に直接補訂を加えた巻と、本文の補訂が間に合わなかった分を正誤表にして付した巻とが混在するのである。再刊を使う時には、この正誤表の存在を忘れてはならない。

以上述べてきたように、再刊を担った大正新脩大藏経刊行会の担当者達は、会員の協力も仰ぎながら、再刊を少しでもよいものにしようと尽力したことが窺い知れる。しかし残念ながら、再刊にも少なからぬ問題が散見しており、その中には大正蔵を利用する上で深刻なものも含まれる。

まず第一の問題は、再刊時の補訂箇所について、何等注記がない点である。当初の予定どおり正誤表1巻が刊行されていれば、どこをどう直したか一目瞭然であったはずである。しかし結局正誤表は刊行されなかったため、1巻1,000頁の大冊を1字ずつ初版と対校するか、あるいは印字面に感得されるかすかな違和感を頼りに補訂が疑われる箇所を見つけ出して初版と比較するより他、再刊時に補訂した箇所を発見する方法がないのである。以下に、いくつか補訂の例を挙げておく。

第12巻No.375『大般涅槃經』p.763脚注⑧「浣=澣㊦*」に該当する

本文は、初版、再刊とも p.764の本文上段第1行第1字の「耶」字の上に脚注番号⑧が付されている。このことについて、初版には脚注等にも説明がないが、再刊には p.763脚注⑧の真下に「(次頁)」が加えられ、該当の本文がp.764にあることを補足している⁽²⁸⁾。また、第19巻 No.0941『釈迦牟尼仏成道在菩提樹降魔讚』、No.0942『釈迦仏讚』について、再刊では、脚注②に「(原麗本)」、③に「原本欠」とあるが、本文では③が No.0941の中段第10行第7～8字「■」の上、②が No.0942の經典名の上に振られていて、脚注番号が逆順になっている。初版の和装本・洋装本を調べると、本文・脚注とも③はないから、この2字が原本の欠字であることを示すため、再刊時に脚注③が補われたものであることがわかる。

第二の問題は、文字の脱落などが補訂されないまま一部残っていることと、補訂された箇所についても必ずしも適切なものばかりでなく、初版に対する妄改の類が散見することである。以下にその例をいくつか挙げる。

まずは、初版で不鮮明もしくは欠落した文字をそのまま欠落した例を挙げる。

第17巻No.0726『六趣輪廻経』 p.455脚注②「此經三本俱無」の「無」字（正誤表未掲載）、第18巻No.0912『建立曼荼羅護摩儀軌』 p.929脚注①「(原)豊山版大正大學藏本」の略号「(原)」、第20巻No.1068『千手観音造次第法儀軌』 p.138脚注③「(甲)平安時代寫仁和寺藏本」の「和」字（正誤表未掲載）、第21巻 No.1251『吽迦陀野儀軌』 p.233脚注⑫「久安三年寫東寺寶菩提院三密藏藏本」の後ろの「三」字（正誤表未掲載）、第41巻No.1821『俱舍論記』卷第28「(甲)寛元元年寫東大寺藏本」の「大」字、第47巻 No.1986A『筠州洞山悟本禪師語録』 p.507脚注①「(甲)元文四年刊玄契編次本大谷大學藏」の「刊」字（正誤表未掲載）、第54巻 No.2140『摩尼經下部讚』「唐代寫燉煌本大英博物館藏本」の「寫」字など、これらは初版の和装本では文字が判読できるのに対し、洋装本では文字が欠落していて、再刊もこれを補訂しなかったものである。これらの事例は、再刊の内容に疑義がある場合、初版の洋装本を見るだけでは不十分であり、和装本を確認する必要があることを示している。

次に補訂時の誤植の例を挙げる。

第7巻 No.220『大般若波羅蜜多經』p.1110の本文「唯爲調善聰慧天衆所受用」の「善」字の上には脚注番号①があるのみで、これに対応する脚注①は、初版の和装・洋装とも存在しないが、再刊では「①善=柔㊦明」という脚注が付けられている。『大般若波羅蜜多經』の底本㊦は麗本を指すが、麗本の影印を確認すると原文と同じく「善」に作る。元本は未見であるが、補訂の際に㊦を㊦に誤った可能性がある。なお、第7巻には正誤表があるが、この箇所に対する訂正はない。

第46巻 No.1929『四教義』p.721脚注①「㊦萬治二年刊宗教大學藏本」の「藏」字は初版では印刷がかすれているが、再刊では「藏」字を誤って略号㊦に改めてしまっている。これは、大正蔵の脚注の書式を理解していれば犯すはずのない間違いである。

第48巻 No.2004『万松老人評唱天童覚和尚頌古從容庵録』p.263脚注①の「連=綽カ㊦」は、初版の和装本では十分判読可能な印刷状態であるのに対し、洋装本では「連=綽カ」がかすれてほぼ判読不能、㊦は若干かすれているが十分判読可能な状態である。それにもかかわらず再刊では「連=綽カ㊦」に作る。あるいは洋装本の中には㊦が判読不能な状態のものがあって、再刊の際に㊦に誤った可能性もある。『万松老人評唱天童覚和尚頌古從容庵録』にはそもそも校本がなく、本書に見える他の脚注も原本に関わるものだけであるから、㊦が入るはずがないことは明らかである。

第8巻 No.261『大乘理趣六波羅蜜多經』pp.914～916の脚注において、初版では仁和寺蔵本を表す略号㊦が11箇所に見られるが、再刊ではすべて知恩院本を表す略号㊦に改めてしまっている。『大乘理趣六波羅蜜多經』の他頁には㊦は出てくるものの、一度も㊦は出てこない。これは、印刷が不鮮明であった㊦を字形の似た㊦に誤ったものである⁽²⁹⁾。

第13巻 No.410『大方広十輪經』pp.681～686の脚注において、初版では正倉院聖語蔵本別寫を表す㊦が頻出するが、再刊ではこのうち p.681の6箇所すべて、p.682の11箇所中2箇所の㊦を㊦に改めている。その結果、p.681脚注①「念憶=憶念㊦㊦」(後ろの㊦が本来は㊦)のように、1つの脚注で㊦が重複するなど、ひと目見ておかしいとわかる誤

りを犯している⁽³⁰⁾。

上記2例のように、(和)を(知)に改めたり、(聖)を(聖)に改めるのは、あまりに初歩的な間違いであり、かつ校本にかかわる部分であるがために深刻度も高い。

第16巻 No.675『深密解脱経』p.669、p.670、p.684にも再刊の際(聖)を(聖)に改めた例が見られる。ここでは、文字の潰れてよみにくい(聖)を(聖)に改めながら、同じページ中に(聖)を残したことで、初版のままの(聖)(聖)と、再刊時に(聖)を改めてしまった(聖)とが混在する状況となっている。これは、再刊でこの箇所の補訂を担当した者が、聖語蔵の別本(聖)を(聖)に改めてしまうことに対して、何の問題意識も持たず、(聖)のうち印刷が不鮮明なものを機械的に(聖)に改めていたことを示している。

上記の事例から、再刊で行われた補訂には、あまりにも初歩的なミスが含まれていること、それによって初版では正しかった部分を却って誤らす事態を惹起していること、そして、このような誤りが大正蔵の再刊に潜在的に含まれていることを示している。

再刊の出版委員の一人望月桓匡は、『会員通信』第9号（前掲）p.1「大正蔵経の再刊に想う」の中で、印刷所は仏教に無知なためひどい失敗を重ねて刷り直すことがしばしばあるとの話を紹介している。このような初歩的な誤りが再刊に見られる原因は、大正新脩大蔵経刊行会と印刷所との連携に原因があった可能性もある。

上記に述べた問題は、再刊の最後に計画されていた正誤表1巻が刊行されていれば、ある程度解決していた可能性がある。しかしながら、正誤表が刊行されていない以上、大正蔵を利用する際には、補訂が施された再刊を用いておけば間違いないと考えるのは誤りであり、初版の和装・洋装の両本と再刊を比較して異同がないか確認する必要があるのである。

三 普及版の刊行

次に、普及版の刊行とその後の増刷について、その経緯や補訂の状況を検討する。

再刊は神田の関山製本社によってハードカバーの上製本で装訂された

が、韓国・台湾で安価な海賊版が作られ、大蔵出版株式会社は経済的な打撃を受けた。そこで、海賊版に対抗するため、同社は普及版を刊行することとなった⁽³¹⁾。普及版は再刊の約60%の厚さで、より扱いやすい並製で装訂され（小石川の常川製本による）、本稿の検討対象である正蔵55巻は、1988年2月から1991年2月にかけて刊行された。

当時の予約受付のチラシによれば、普及版の特色として、「内容は同じまま 目次から最終頁まで、内容は元版と全く同じです。」とあり、内容構成・本文とも「元版」つまり再刊と全く同じであると明記されている⁽³²⁾。しかしながら、普及版の本文を再刊の正誤表と見比べると、第23巻 p.724本文の脚注番号⑥を、普及版では正誤表の通りに⑨に訂正するなどの補訂がなされている。なかでも第12巻 p.1026脚注⑰で校勘記号「=」（字句の異同を表す）が重出する点については、普及版では正誤表に従って「=」を一つ削除し、さらに空いた1字分を空格とはせず、次行にわたって文字を1字ずつ詰めている。この部分の字様（活字の欠け等）は再刊と近似していることから、新たに活字を組んだのではなく、再刊を切り貼りしてずらしたものと見られる。

再刊の正誤表に対する普及版での対処状況をまとめたものが、前節でも取り上げた【表2 再刊正誤表件数及び普及版修正率】である。この表を見ればわかるように、普及版では再刊の正誤表による補訂が一部行われているが、その割合は全体の約60パーセントであり、かつ同一巻内でも補訂されている箇所と補訂されていない箇所が混在している。普及版刊行の際に一括して正誤表に基づく補訂を行ったのであれば、このような状況は生じにくい。おそらく再刊時に正誤表を作成した際、後日の再版を期して、正誤表の文字を切り取ってフィルムの元となった洋装本の原本に貼り付けたものの、経年劣化により一部剥落してしまったものがあつたためではないかと推測される。第2巻のみ1件も補訂が見られないが、これは、再刊・索引等の編集・刊行に追われ、原本に正誤を貼り付けるのを忘れたまま、普及版の刊行を迎えてしまったのかもしれない。

要するに、普及版は再刊と全く同じといいながら、実は再刊時に作成された正誤表に基づく補訂が行われた原本を用いたことによって、期せ

ずして再刊との間に一部テキストの異同が生じてしまったのである。

その後、普及版にも在庫切れの巻が生じ出したことから、最近では普及版の増刷も行われている。印刷製本は神田司町の富士リプロ株式会社が請け負い、2014年以降、在庫切れとなった巻に対して順次増刷が行われている。2019年6月の時点では、2014年4月に第6・16・35巻、8月に第18巻、2015年4月に第2・8巻、2017年12月に第8・10巻、2018年4月に第2・15巻、7月に第6・25・49巻、9月に第26・30・38・46・55巻、2019年3月に第12巻が増刷され、第6・8巻に至っては2回ずつ増刷されている。増刷の際には、普及版の冊子をバラしてスキャンした上で、版面の汚れの除去等を行っているものの、文字や内容の修正等は一切なく、富士リプロの社名を入れた奥付頁を組み直したのを除き、すべて原版のまま印刷しているとのことである⁽³³⁾。印刷工程から考えて、普及版と増刷の内容は同一と考えてよからう。

おわりに

以上、大正蔵の初版、再刊、および普及版について刊行の経緯を概説しながら、それぞれの特徴・問題点について検討してきた。その結果、これらは完全に同一のテキストとはいえないことが明らかとなった。

初版は毎月1冊配本というタイトなスケジュールで編集刊行されたがゆえに編集・校合・校正上の誤脱が多いうえ、和装本と洋装本は基本的に同一であるものの、洋装本は印刷状態が悪く、和装本に比べて文字のかすれ・欠落が多々見られる。

初版の紙型は東京大空襲によって焼失したため、再刊は洋装本を原本として補訂を加えてフィルム撮影した上でオフセット印刷にて刊行された。しかしながら当初予定されていた正誤表1巻が結局刊行されなかったため、どこをどういった理由で何を根拠に直したかが不分明であり、なおかつ補訂の限界として洋装本の脱誤を見落とししたり、補訂の際に却って誤ってしまった例などが散見し、なかには補訂の信頼性に疑念を抱かせるような致命的なミスも見受けられる。また、再刊の第40～72回配本にかけて、本文の補訂が間に合わず、巻ごとに印刷の不鮮明な箇所や誤

字・脱字をリストアップした正誤表が作成された。

普及版は再刊の覆刻本であるが、この正誤表に基づく補訂を加えた原本を元にリプリントしたことで、再刊との間にテキスト上の異同を生じることとなった。

これら大正蔵のテキストをめぐる問題は、初版の和装本・洋装本、再刊、普及版のいずれかを用いれば解決するという単純なものではない。そのため、大正蔵を利用する際は、これら諸版と再刊の正誤表を比較して、もし異同があれば、初版の和装本・洋装本の印刷状態の違いによるものなのか、初版の誤脱を再刊が補訂したことによるものなのか、はたまた普及版のうち再刊の正誤表によって補訂された部分であるのかなど、異同が生じた原因を究明して、どの版に従うべきか検討する必要があるのである。この事実は、大正蔵自身が校異・校定を必要していることを示すものであって、大正蔵が WEB 上のテキスト・画像データベースとして活用され、世界的なスタンダードテキストとなっている現状において決して看過できない問題である。大正蔵の利用者は、いま自分が使っているテキスト・画像がどの版であるのかを自覚した上で用いる必要があるのである。

最後に、本稿の執筆に当たっては、大蔵出版株式会社営業部の石原俊道氏、富士リプロ株式会社営業担当の平山弘毅氏、および同社の大正蔵普及版増刷担当の各位に多大なご教示をいただいた。また関連資料の閲覧・複写に当たっては、大正大学附属図書館、大谷大学図書館にお世話になった。また、東洋文庫所蔵の初版洋装本については、はなはだ劣化した状態にあったものを資料保存の専門家田村彩子氏に修復いただき、株式会社カロワークスの竹内涼子氏に部分撮影をしていただいた。ここに記して厚く御礼申し上げたい。

本研究は、JSPS 科研費18K00073の助成を受けたものである。

註

- (1) 『大正新脩大蔵経刊行略誌並芳名録』（大蔵出版株式会社、1943年5月。東洋文庫所蔵）「緒言」による。
- (2) 東洋文庫の図書原簿によれば、1923年5月30日に「大正新修大蔵経（和

装55帙)、申込金」30.00円の支払い記録があり、1929年3月7日に「新修大正大藏経第54巻、第19巻」18.36円の支払い記録がある。

- (3) 『大正新脩大藏経会員通信』(以下「『会員通信』」と略す)第49号(大正新脩大藏経刊行会、1967年5月) p.2「『会員紹介22』には、再刊の会員つまり購入者として東洋文庫と榎一雄(東洋文庫内)が紹介されているが、現在東洋文庫は再刊の全蔵を所蔵していない。
- (4) 和田維四郎は、第24巻 No.1484『梵網経』(『大正新脩大藏経勘同目録』(『昭和法宝総目録』第1巻(1929年8月)所収)「和田維四郎藏本承久二年乘願刊)、第51巻 No.2089『遊方記抄』の「唐大和上東征傳」(p.988脚注①「㊦南北朝時代寫、和田維四郎藏本」、第55巻 No.2176『諸阿闍梨真言密教部類總録』(p.1113脚注①「㊦康保二年寫和田維四郎氏藏本」、石田幹之助は、第54巻 No.2144『大秦景教流行中国碑頌』(p.1289脚注①「㊦拓本石田幹之助氏藏)にその蔵書を提供している。なお、㊦は底本に用いたテキスト、㊦は校本に用いたテキストを指す。大正蔵に採用された底本・校本の略号とその変遷については、拙稿「『大正新脩大藏経』の底本と校本—巻末「略符」・『大正新脩大藏経勘同目録』・脚注の分析を通して」(2020年3月、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」収載 <http://id.nii.ac.jp/1629/00007257/>)を参照。
- (5) 『大正新脩大藏経刊行略誌並芳名録』(前掲注(1))「援護者芳名(二)事業援護並ニ翼賛」を参照。
- (6) 『会員通信』第3号(1970年10月) p.4参照。
- (7) 以上は、土肥義和研究員の夫人土肥祐子研究員のご教示による。
- (8) 拙稿「38〔大藏経〕(或一切経)1454種5733巻附字函積音532巻」(宮内庁書陵部藏漢籍研究会編『図書寮漢籍叢考』(汲古書院、2018年2月)図録編「Ⅲ宋版」所収)を参照(157~159頁)。当時作成した宮本の全書誌データは完成が遅れた関係でいまだ公開できていないが、その概要と画像データが「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧—書誌書影・全文影像データベース—」(http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=007075)で公開されている。
- (9) 拙稿「増上寺報恩蔵(西蓮社)と『大正新脩大藏経』の編纂」(『仏教史学研究』第60巻第2号、2018年3月)を参照。

- (10) いずれも松永知海編『秋期特別展近代の大蔵経と浄土宗—縮刷蔵経から大正蔵経へ—』（佛教大学宗教文化ミュージアム、2014年10月）「列品解説」参考8に個人蔵として紹介されている。この他、再刊時のものとして、次の2点が紹介されている。
- ・『大正新脩大蔵経 内容見本 全88巻』（1960年3月頃）。1960年3月付「再刊の趣旨」等載せる。「全88巻」の内訳は、正蔵55巻、続蔵30巻、『昭和法宝総目録』3巻であり、そのほか別巻総目録の刊行に言及する。
 - ・『大正新脩大蔵経 本巻全八十八巻 索引全四十八巻 内容見本』（1962年7月頃）。1962年付「索引刊行のことば」等載せ、索引48巻の刊行と、入手しにくい図像部12巻の500部限定予約の受付について告知した時のもの。
- (11) これと同種の資料に、『朝日新聞』1927年10月11日・11月10日東京朝刊第1面掲載の「最終會員募集」の広告記事がある。
- (12) これと同種の資料に、『朝日新聞』1929年4月12日・6月9日東京朝刊第1面掲載の「大正新脩大蔵経續刊」「内容見本進呈」の広告記事がある。
- (13) 『会員通信』第5号（1960年12月）p.1松本徳明「追憶随想」を参照。
- (14) 拙稿「増上寺報恩蔵（西蓮社）と『大正新脩大蔵経』の編纂」（前掲注（9））pp.78～79を参照。
- (15) 和装本の装訂は、神田須田町の芝本製本所が担当し、洋装本は西江戸川町（現在の文京区水道1～2丁目）の植木製本所が担当した（③『大正新脩大蔵経総目録 附会員名簿』（前掲）別冊付録「刊行経過要略」pp.25～27等）。また洋装本は、当初、背革布製・天金の特製本と、洋装仮製（上質表装）の2種を刊行する予定であったが、1冊1,000頁からなる大正蔵は、仮製本に向いていなかったため、実際に作成されなかったであろう。
- (16) 例を挙げると、洋装本では p.45脚注⑦「命=令㊦」の「命」がかすれにより判読不能、p.129脚注①「聲=身㊦」の「聲」の下半分が欠落、pp.136～137の本文にかすれて判読困難な文字が散見、p.137脚注①「暉=諍㊦」の㊦（㊦は宋本・元本・明本の三本を示す略号）が欠落、という

印刷状態であるが、和装本ではいずれも問題なく印刷されている。なお、洋装本は裏写りも強い傾向にある。

- (17) 『現代仏教』第5巻第55号「大正新脩大藏經完成記念号」（前掲）に本索引の広告が掲載されている（p.113）。
- (18) 『会員通信』は、第14巻所収の『仏説分別經』（竺法護訳）は本文こそ第17巻収録分と同じであるが、脚注に異同があるとし、該当箇所を列挙している。
- (19) 『現代仏教』第5巻第55号「大正新脩大藏經完成記念号」（前掲）の巻末と裏表紙に広告が掲載されている。『朝日新聞』1928年10月15日・30日、11月27日・29日の東京朝刊第1面にも「完成記念特別募集」の広告記事が掲載されている。
- (20) 大藏出版株式会社は、高楠順次郎等が、1932年2月、大正藏の第85巻を刊行して統藏全30巻の刊行を終えた後、同年6月、大正藏の図像部を刊行して大正藏刊行事業を完結させるため、各宗本山・大寺をはじめ学会・仏教界等多数の出資によって設立した会社である。同社は、1934年9月までに図像部全12巻を刊行し、同年11月に『昭和法宝総目録』第3巻を刊行して、大正藏の初版全100巻は完結した。
- (21) 『会員通信』第1号（1960年8月）p.1「再刊に至るまで」、p.2「再版の印刷と製本」を参照。
- (22) 『会員通信』第1号（前掲）p.1「大正新脩大藏經再刊の趣旨」による。初出は『大正新脩大藏經 内容見本 全88巻』（前掲注（10））と推測されるが未見。
- (23) 『会員通信』第1号（前掲）p.2「再版の印刷と製本」等を参照。
- (24) 『会員通信』第2号（1960年9月）p.3「激励のこゝば 会員の声」に対する「お答えとお願い」を参照。
- (25) なお、補訂に当たって真っ先に利用すべき資料として、先述の『大正新脩大藏經索引第1巻阿含部上』に付された「第一巻阿含部上正誤」全53件があるが、再刊で修正されているのはわずか4件のみであった。具体的には、p.3脚注「～Bāraṇasi」を「～Bārāṇasi」に、p.486脚注「㊸～A. V.」を「㊸～A. V.」に、p.496C「如意足丘」を「如意足亦失比丘」に、p.853C「佛説阿耨③風徑」の「徑」を「經」に修正している。とく

に p.496C の 3 字の追加に当たっては、第21行から該当箇所のある第29行にかけて字詰めを少しずつ詰めることで、3字分を挿入するスペースを捻出している。この正誤表の多くは誤字・脱字の類であるから、再刊に当たってこれを取捨選択したのではなく、単にこの正誤表を見ていなかったものと考えられる。

- (26) 正誤表は本冊と同封、あるいは別途送付され、購入者は見返しなどに糊付けするのが常であるが、糊付けされずに紛失したり、あるいは剥がれて紛失したり、補修のための改装の際、表紙とともに廃棄されてしまう可能性がある。正誤表には「この紙の文字を貼りつけてください。」と記してあるものもあるから、この説明書き通りに切り貼りした購入者もいたであろう。
- (27) 大正新脩大藏経刊行会主事の塩入良道は、『会員通信』第38号（1964年8月）p.1に寄せた「大正新脩大藏経再刊に携わって」の中で、索引の刊行事業が再刊刊行の遅延を招いたことに言及する。すなわち1958年に索引作成の議が起り、大谷・駒沢・高野山・大正・立正・龍谷の6大学が中心となって大藏経学術用語研究会が組織され、1961年に文部省の出版助成を得て以後、毘曇部下・華嚴部を刊行し、1963年度からは年2冊の索引刊行の助成を得たことで、大藏経配本の遅配はやむを得ない状況となった。同じく第38号「会員の声」欄の第37回配本の遅延に関する問い合わせに対して、延べ2名で再刊の作業に当たっているところへ急ぎの業務や工場の人手不足・機械の故障が重なり、刊行が遅れてしまったと回答している。他第46号（1966年5月）p.4「編集室から」、第66号（1972年3月）p.4「板目白台」にも遅延の理由に関する記述が見られる。
- (28) なお、「SAT 大正新脩大藏経テキストデータベース2018版（SAT 2018）」（<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>）の該当部分は、テキストは初版と同じく「(次頁)」がないが、画像は再刊と同じくこれがある
- (29) なお、SATの該当部分は、画像は再刊を用い、テキストは初版と同じくⓂに作る。
- (30) なお、SATの該当部分は、画像は再刊を用い、テキストは初版と同じく「<聖・別>」に作る。

- (31) 青山賢治（大蔵出版株式会社代表取締役）「出版権はないのか—国会図書館の横暴」（『出版ニュース』2013年4月中旬号、出版ニュース社）を参照。
- (32) 「【予約受付中】普及版大正新脩大蔵経全88巻」と題するチラシを、大蔵出版株式会社営業部石原俊道氏よりご提供いただいた。
- (33) 普及版の増刷については、富士リプロ株式会社営業担当の平山弘毅氏にご教示を得た。なお、本稿の検討対象である正蔵55巻以外では、2014年4月に第83巻、2018年9月に第63・74・75巻を増刷したとのことである。増刷の装訂は、一見、原版となった普及版と同じであるが、表紙が固く、料紙も若干分厚い。

（公益財団法人東洋文庫研究部主幹研究員）